



御拝礼を終えられた常陸宮同妃両殿下



マーシャル方面遺族会  
 (旧クエゼリン方面戦没者遺族会)  
 〒103 東京都中央区  
 日本橋人形町1-8-2  
 電話 03-3661-8760  
 FAX 03-3661-6241  
 振替東京 00100-0-93487  
 編集兼発行人 佐藤宗丕

# 平成九年度

## 慰霊祭 総会 直会

### 黒川 誠

平成九年四月五日(土)靖國の桜は満開となりましたが、前夜からの雨は当日も残って菜種つゆとなりました。

それでも受付開始前から熱心な会員の皆さんが次々と受付をすませて参集所に入り、顔見知りの方々と久しぶりの挨拶やお話もはずんで賑やかになりました。今日は団体参拝者だけでも、二千人を超えるという盛況で大変な混雑でしたが、皆さんは整然と、晝間常任幹事の行事予定を聞いていました。定刻午前十時、みたらして心身を清め、拝殿に正座して修祓をうけ、回廊から御本殿に昇って、献饌、祭主の祝詞奏上にはじまり、佐藤会長の祭文奏上に往事を偲んで感無量。

玉串奉奠は、佐藤会長、栗林顧問、来賓の壹岐春記様、妻の藤田清瀬様と北原ひで子様、兄の村上清隆様と斎藤耕太郎様、弟の高橋鎮夫様と菊地彦巨様、妹の孫の山口実咲様の以上十名が奉仕し、全員これに合わせて二礼二拍手一礼の作法で拝礼し、暫し瞑目して御霊の御冥福をお祈りしました。

御本殿を退下して御神酒と御神饌を頂戴し、予定されていた記念撮影は雨のため割愛して靖國會館に移動しました。

会場には写真が沢山展示されており、ルオットのクーロング御夫妻が墓苑を清掃して鳥居と柵のペンキ塗りを行っているところやお供えもの盛沢山の墓碑の様子のほか厚生省社会・援護局の森田資料調査室長と黒木外事第二係長がクエゼリンで御遺骨九十九柱を受領して、マジユロで焼骨し五十三年ぶりに祖国にお迎えした一連の記録でした。皆さん感慨深げに見入っております。

十一時三十分、内海幹事の司会で定期総会を開会、晝間常任幹事を議長に選び議事に入りました。会長からの挨拶に続

|    |
|----|
| 目次 |
|----|

|                   |    |
|-------------------|----|
| 平成九年度 慰霊祭 総会 直会   | 1  |
| ..... 黒川 誠        | 1  |
| 明年の慰霊祭は4月5日です     | 2  |
| 役員等決定             | 2  |
| 厚生省主催の現地慰霊巡拝に     | 3  |
| 参加を希望する方々へ        | 3  |
| クエゼリン島より御遺骨を      | 5  |
| 迎える..... 黒木 信也    | 5  |
| ギルバートより           | 6  |
| 御遺骨帰還..... 盛川 英治  | 6  |
| 靖國神社春季例大祭         | 7  |
| 千鳥ヶ淵戦没者墓苑拝礼式      | 7  |
| 霊苑点描              | 8  |
| 第二十七回戦没殉職船員       | 8  |
| 追悼式に参列して          | 8  |
| 輸送船と船員..... 川副 克己 | 9  |
| ブラウンから選ってきた       | 9  |
| 父の日誌..... 荒木 常子   | 10 |
| 英子・ラポイントさん        | 10 |
| クエゼリンから一時帰国       | 12 |
| お便りの中から           | 12 |
| 徳原 徳子 節子・クーロンク    | 12 |
| 私の歩んだ道..... 中根 杉子 | 13 |
| 名簿訂正(12)          | 14 |
| 靖國神社の宮司が          | 15 |
| 交替されました           | 15 |
| 紙の雛人形             | 15 |
| 寄付者芳名             | 15 |
| 本部便り              | 16 |
| 訂 報               | 16 |
| 訂 正               | 16 |

春爛漫



いて、平成八年度の一般会務報告があり、関連事項として、厚生省によって三月二十三日にクエゼリン環礁から十九柱、二月二十七日にキリバス共和国から七柱の御遺骨が懐かしい祖国に帰還されたこと、また、五月二十六日には、千鳥ヶ淵戦没者墓苑の納骨室に奉安され、厳肅に拝礼の儀式が行われる予定であると披露されました。

次に黒川常任幹事が決算を、佐竹監事が監査結果をそれぞれ報告し、以上三件を一括審議し、承認されました。次に会長から本年度の会務計画と予算案の説明があり、特に、会員の老齢化に伴い慰霊祭の参列者が会員の二割程度という現状から、会報「環礁」の

充実を重点にしたいので資料の提供などについて会員、会友の皆さまの御協力をお願いしたいと要請された。両案を可決の後、会長から厚生省による来年二月のマーシャル、ギルバート方面への慰霊巡拝に参加を希望される方は、なるべく早く居住地の都道府県の援護担当課に問い合わせるようにと話されました。

次に議長は、「本日役員全員が任期満了となる。会則では、会長と監事は総会で選任することになっている」と述べ、会場に諮った結果、会長と監事二名の再任を決定しました。次に、その他の役員は会長が指名することになっているので、会長に指名を求めました。会長は、会場に私案を述べ全員の賛同を得て、別項の通り指名しました。

以上ですべての議事を終了し、来賓の中攻会（海軍陸上中型攻撃機隊）代表壹岐春記様から丁寧な御挨拶を頂きました。

次はビデオの映写です。一本は「環礁」64号で紹介された豊谷美恵子さんがニューギニア戦跡から持帰った二宮元巳命の認識票に係わるもの。他の一本は、ルオット島の節子・クローングさんから寄贈されたもので、スキューバダイビングが趣味の御夫君子チャードさんが撮ったクエゼリンヤルオットの風物と海中の景色です。

本会と縁の深い秋葉山丸その他の軍船の残骸と、澄みきった青い海を泳ぐ

色鮮やかな熱帯魚の対照は何時迄も心に残りました。

早朝からの昇殿参拝や定期総会、ビデオなど休む暇もない行事が続きましたが、漸く開放されて直会になりました。会長の挨拶と乾杯の発声で喉をうるおし会食、懇談ひとしきり。やがて海軍音楽隊出身の菅光先生の御奉仕によるアコーディオン演奏にしばし耳を傾けました。

つづいて菅先生の伴奏による懐かしい日本の歌の合唱に移りました。

「赤とんぼ」「月の砂漠」「浜千鳥」「荒城の月」「美しき天然」「青い山脈」「南洋航路」「麦と兵隊」「海行かば」「戦友」「靖國神社の歌」「九段の杜」（仮称、武田節の替歌）と続き、家族で、又はグループが、壇上で合唱するもの、見事なソプラノで独唱するものもあって大いに盛り上がり、午後二時四十分来年を約しておひらきとなりました。折よく雨も上がり意義深い一日を過した思いを胸にそれぞれに家路につきました。

### 本会の役員等の決定

本会の役員等が、総会及び役員会の決定により夫々次の通り選任又は委嘱されました。任期は何れも二ケ年です。

|      |         |
|------|---------|
| 顧問   | 栗林 徳五郎  |
| 相談役  | 大給 湛子   |
| 会長   | 佐藤 宗 丕  |
| 副会長  | 黒川 誠    |
| 同    | 晝間 樂 平  |
| 常任幹事 | 荒木 常 子  |
| 同    | 内海 淑 子  |
| 幹 事  | 石谷 典 夫  |
| 同    | 高林 芳 夫  |
| 同    | 山口 良 二  |
| 監 事  | 佐竹 エ ス  |
| 同    | 高橋 鎮 夫  |
| 同    | 徳原 徳 子  |
| 同    | 長谷川 栄 次 |
| 同    | 長谷川 敏   |
| 同    | 松平 永 芳  |
| 同    | 山村 要    |

### ☆ 広報委員

|                   |
|-------------------|
| 佐藤 宗丕・黒川 誠・晝間 樂平  |
| 荒木 常子・内海 淑子・石谷 典夫 |
| 山口 正雄             |

### 明年の慰霊祭・総会・直会は平成十年四月五日(日)です

明年の慰霊祭は桜の好季節四月五日(日)に靖國神社で行います。

詳細は明年二月一日発行の「環礁」68号でお知らせします。





厚生省は、本年度事業として大略次のように現地慰霊を計画しています。参加を希望する方はなるべく早く、居住する都道府県庁の厚生、援護主管課にお申込みください。

地域 マーシャル諸島のマジユロ、クエゼリン、ギルバート諸島のタラワ等。

時期 平成十年二月中旬 成田出発

人員 三十人

実施期間 九日間

経費 四五〜五十万円(初めての方に  
は約三分の一が補助されます)

厚生省主催の現地慰霊巡拝に参加を希望する方々へ

第33期決算報告書 (自平成8年1月1日 至平成8年12月31日)

第34期一般会計予算

マーシャル方面遺族会

(自平成9年1月1日 至平成9年12月31日)

1 一般会計収支計算書

2 一般会計財産目録 (平成8年12月31日現在)

<収入の部>

| 科 目     | 金 額         |
|---------|-------------|
| 前期より繰越  | 5,027,279   |
| 会 費     | 1,071,000   |
| 寄 付 金 等 | 1,665,587   |
| 受 取 利 息 | 92,861      |
| 雑 収 入   | 126,557     |
| (小 計)   | (2,956,005) |
| 合 計     | 7,983,284   |

| 資 産 の 部 |           | 負 債 の 部   |           |
|---------|-----------|-----------|-----------|
| 科 目     | 金 額       | 科 目       | 金 額       |
| 現 金     | 103,317   | 預 かり 金    | 1,000     |
| 普 通 預 金 | 577,624   |           |           |
| 郵 便 振 替 | 0         |           |           |
| 通 知 預 金 | 0         |           |           |
| 金 銭 信 託 | 2,236,885 |           |           |
| 定 期 預 金 | 2,500,000 | 次 期 へ 繰 越 | 5,416,826 |
| 合 計     | 5,417,826 | 合 計       | 5,417,826 |

<収入の部>

| 科 目     | 金 額         |
|---------|-------------|
| 前期より繰越  | 5,416,826   |
| 会 費     | 1,000,000   |
| 寄 付 金 等 | 1,500,000   |
| 受 取 利 息 | 50,000      |
| 雑 収 入   | 100,000     |
| (小 計)   | (2,650,000) |
| 合 計     | 8,066,826   |

<支出の部>

| 科 目       | 金 額         |
|-----------|-------------|
| 慰 霊 費     | 440,147     |
| 運 営 費     | 498,675     |
| 事 務 所 費   | 600,000     |
| 広 報 費     | 631,831     |
| 印 刷 費     | 1,803       |
| 通 信 費     | 130,106     |
| 消 耗 品 費   | 29,449      |
| 会 議 費     | 107,502     |
| 送 金 諸 費   | 37,529      |
| 公 租 公 課   | 18,451      |
| 雑 費       | 70,965      |
| (小 計)     | (2,566,458) |
| 次 期 へ 繰 越 | 5,416,826   |
| 合 計       | 7,983,284   |

3 特別会計 (現地慰霊碑維持基金勘定)

| 収 入 の 部 |           | 支 出 の 部   |           |
|---------|-----------|-----------|-----------|
| 科 目     | 金 額       | 科 目       | 金 額       |
| 前期より繰越  | 7,500,000 |           |           |
|         |           | 次 期 へ 繰 越 | 7,500,000 |
| 合 計     | 7,500,000 | 合 計       | 7,500,000 |

(注) 定額貯金及び貸付信託として保管。

監査の結果上記の報告は適正且つ正確であることを認めます。

平成9年2月24日

監 事 高 橋 鎮 夫 ㊟

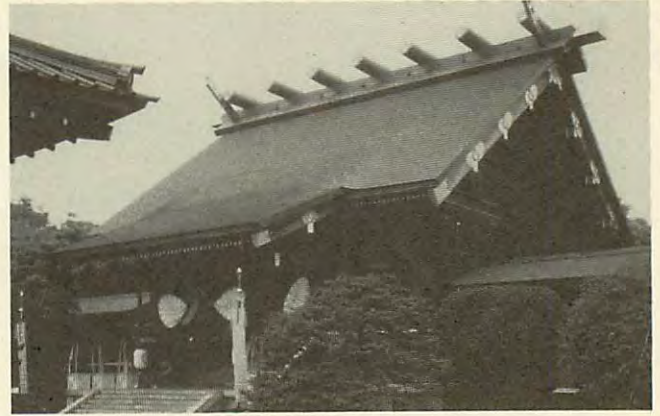
同 佐 竹 エ ス ㊟

会 長 佐 藤 宗 丕 ㊟

<支出の部>

| 科 目       | 金 額         |
|-----------|-------------|
| 慰 霊 費     | 450,000     |
| 運 営 費     | 600,000     |
| 事 務 所 費   | 600,000     |
| 広 報 費     | 650,000     |
| 印 刷 費     | 30,000      |
| 通 信 費     | 130,000     |
| 消 耗 品 費   | 30,000      |
| 会 議 費     | 100,000     |
| 送 金 諸 費   | 30,000      |
| 公 租 公 課   | 10,000      |
| 雑 費       | 30,000      |
| (小 計)     | (2,660,000) |
| 次 期 へ 繰 越 | 5,406,826   |
| 合 計       | 8,066,826   |

本殿



慰霊祭参列者芳名

(敬称略、順不同)

本年四月五日(土)の慰霊祭に参列されたのは一九七名で、本会は参列者一名につき五百円の初穂料を奉納しましたが、受付で確認できた参列者は次の一九〇名です。

- 顧問 栗林徳五郎 来實 壹岐 春記
- 篤志会員 松平 永芳
- 宮城 高橋とし子 小松 順子
- 松本 孝子
- 秋田 奥山 キノ
- 山形 長岡 仙一
- 福島 鶴沼 久義 小賀坂四郎
- 小賀坂マス 小賀坂清治 小賀坂美枝子
- 鈴木 信子 鈴木 勝美 山岸 ミイ
- 水野 節子 鈴木ヨシエ 富田 ミツ
- 富田 キミ
- 茨城 安藤 啓次 安藤 やす
- 鈴木やよひ 鈴木多賀雄 大部美智子
- 神永さかえ 柳沢 弘子 根本さとみ
- 栃木 菊地 彦亘 近藤 芳雄
- 松本 照和 松本 ユキ 大橋 ヒデ
- 宮下 セツ
- 群馬 日向野キク
- 埼玉 天野 好子 井沢 なを
- 小野 博孝 片桐 覚治 北原ひで子
- 櫻井 かね 小野塚君子 鎌田 朝子
- 菅野 久雄 菅野つね子 小田原利子
- 小野トキ子 野田 雅子 服部 陽一

- 藤田 清瀬 山下 みつ 高林 芳夫 山田 良郎 藤田 正勝
- 千葉 岩佐 とみ 田中 雄吉 富山 棚橋 昭二 広上 敏夫
- 豊谷美恵子 豊谷 秀光 堀口 太平 村梶 光栄 福井 田賀 将一 田賀 朋子
- 芳賀タツエ 宮本 豊吉 秋元 輝夫 田賀 英子 田賀 奨 田賀 護
- 東京 荒木 常子 内海 淑子 田賀 茜 坪内 一枝
- 石川 勲 石谷 典夫 大山 葉子 長野 伊藤 正人 伊藤さだ子
- 遠藤 安男 大山美穂子 片岡 良子 伊藤ますの 山田 二美 青木 経子
- 押谷 義雄 片岡 良子 片岡 正人 静岡 服部くにゑ 三浦 たき
- 黒川 誠 黒川 直吉 栗林 桂五 愛知 山田 伸治 山下 治
- 小島八重子 小山キミ子 佐竹 エス 大見シノブ 浜田 芳枝 山田 あき
- 佐藤 宗丕 佐藤 ナヲ 齊藤耕太郎 野々山香代 兵庫 土井 厚二
- 齊藤 美美 坂本美枝子 鳥崎 正猪 奈良 山中 美子 栗山 美子
- 白井まさ子 白井 勝年 白井小夜子 広島 佐々木千鶴子 佐々木文也
- 白井 正恵 鈴木つな子 菅沼 昇 瀬戸 隆子 児玉サトヨ
- 菅谷喜代子 関口 さと 高橋 鎮夫 香川 隆子 石川 正興 石川 妙子
- 谷梯 初江 中村 順子 西沢 和子 瀬戸 隆子 石川 正興 石川 妙子
- 沼山 正英 蓮沼 常子 蓮沼 一栄 香川 隆子 石川 正興 石川 妙子
- 浜田つき子 伊藤たつ子 番場 信子 眞鍋 公代 眞鍋 正美 眞鍋 信一
- 晝間 樂平 晝間志津子 柳沢 正雄 土田 眞治 土田 理絵
- 山口 裕子 山口 良二 山口 明子 愛媛 兵頭 義彦 松友 公子
- 山口 美咲 渡辺 妙子 渡辺 勇 福岡 鐘ヶ江敬介 村上 清隆
- 田淵三七子 安達喜久子 出口 スエ 佐賀 草場 寛 草場 奈々
- 佐久間フミ子 赤坂 スズ 岩瀬三樹三郎 熊本 土田 利子 鹿兒島 村上 義博 村上 芳江
- 神奈川 岩田とし子 内藤 つる
- 岩瀬 純子 岩田とし子 内藤 つる
- 渡辺キヨ子 大島 義治 大島 昇
- 桃谷 友孝 佐藤 隆一 佐藤 章子
- 佐藤加久也 佐藤藤起子 宍戸献吉郎
- 西森サツキ 服部 純昌 服部 操
- 萩原 誠 安威 孝司 安威 和子
- 橋田 正幸 平井 貢 平井 一雄
- 松江 正子
- 新潟 山田 正三 山田キヨエ

昭和天皇御製

靖國神社百年祭 (昭和四十四年)

國のため いのちささげし

人々を

まつれる宮は

ももとせへたり

(六月拝殿掲示)

折角慰霊祭に参列し、昇殿参拝しながら受付で申告しなかったため、お名前を確認できない方が今年七名おられました。

## クエゼリン島より

## 御遺骨を迎える

厚生事務官 黒木 信也

マーシャル諸島共和国のクエゼリン島から受領した御遺骨について、お知らせします。

クエゼリン島の米軍病院に日本人戦没者の遺骨があるという情報は、マーシャル方面遺族会の佐藤会長から得たものであり、祖国への送還について外務省欧亜局大洋州課を通じて、マーシャル諸島共和国政府に対して申し入れたところ、同地に平成九年一月から大使館が新設したこともあり、この度の受領が可能となりました。

三月十七日(月)、森田室長とともに成田を出発し、ホノルルで大使館の片岡理事官と合流し、十八日にマジュロに到着しました。空港で大使館との計画の打ち合わせを行い、その場で通訳としてお願いするカナメ・ヤママラ氏の紹介を受けました。今回の用務が成功したのは、彼の協力を得たことが、大きく評価できます。

彼は、父が日本人で母がミクロネシア人であり、日本語が達者であるばかりではなく、思考が日本的であることや現地ではかなりの有力者であることが今回の用務を果たすことができた大きな要因であったと感謝しております。さて、十八日は主に関係先の表敬訪

間を行いました。

米国大使のジョアン・ブレイテッド女史と担当者のトーマス・キーン氏に今回の御遺骨受領に関しての感謝の意を申し述べ、担当者とも米軍基地での受領に関する打ち合わせを行いました。

今後御遺骨収集の許可を得る必要が生じたときのため、関係省庁である内務省のレネット・ランキン務次官代行と歴史保存局のボリス・デウネート鑑定士、クラリイ・マクロロ担当者に、表敬挨拶をし、今回の目的と日本人の心情を説明し、日本人墓地発掘の要請があつたときは格別のお取扱いを頂きたいと申し入れました。

また、デウネート鑑定士が日本人戦没者であると鑑定した完全一体分の御遺骨を保管していたのを受領することができました。この御遺骨は、米軍がロイ・ナムル島で発電工事をしている際に発見したものであつて、滞在の初日から思わぬ収穫を得ました。

日本大使館の三枝臨時代理大使を表敬訪問して、今回の御遺骨受領に関する外交手続き等の便宜供与に対するお礼を申し述べ、今後も日本人戦没者の御遺骨を本邦に送還できるようご尽力をお願いしました。

十九日、いよいよ目的地であるクエゼリン島にエア・マーシャル航空の小型機で出発し、一時間余りで島に到着しました。空港では、今回米軍との調整をしてくれた米軍司令官秘書である

マリアン・レイン女史と、島に滞在している日本人の英子・ラポイントさんが出迎えてくれました。すぐに基地の責任者であるコツテル司令官に表敬挨拶を行い、日本人戦没者の遺骨を長い間保管していただいたことに感謝の意を表明したところ、司令官より「祖国に送還することは意義のあることであり、今後も遺骨送還には協力する」と申されました。我々に好意的な司令官であつたのは大変有り難いことでした。

米軍病院では、英子さんが病院長の秘書をしていることも幸いして滞りなく御遺骨を受領することができた。エリック・リンボーグ病院長に挨拶をした後、御遺骨を保管してくれていたレイ・ウォルフ氏から御遺骨を受領しました。

ウォルフ氏は、米軍基地内で発見された御遺骨を自分がいる医療器具などの保管場所に嚴重な木箱に納めてあり、丁重に白布でくるんでありました。箱は楕圓形の大きさと、総重量を量つたところ、六十八kgもあり、ただただその量に驚きました。ウォルフ氏の御遺骨に対する取扱いは、親しい友人のそれに対するように丁重で、我々は心から感動し厚く御礼を申し上げると「お引渡しできて嬉しい。今後も協力する」と言われました。

病院を離れる際に、マーシャル政府のハイラム・マクロロ内務省クエゼリン島管轄担当官が来訪されたので、今後

とも協力されるよう要請をしたところ、彼の従兄弟が、日本の大使館で勤務していることもあり、極力協力すると快諾されました。

御遺骨受領後、レインさんの案内で日本人墓地を視察しました。墓地は、米軍との戦闘場所であり、まさに激戦地であるといえるが、墓地の敷地は約十三m四方くらいのもので、大量に御遺骨が存在するとは思えなかつた。先ずは調査が必要であると感じました。

島から出発する際、受領した御遺骨の量から機内持ち込みができないため、コンチネンタル航空に交渉したところ、専用コンテナで運搬してくれました。

二十日、カナメさんの手配でMJC(C(日・マ合弁会社)のキクチさんから、トラックのレンタルと、廃材の配給をうけ、トタンを借用しました。途中スタンドに寄つたあと、焼骨場所(Wofja Lokobar Weto)に到着しました。焼骨の場所は、カナメさんが彼の知人の所有する浜辺に近い丁度適当な土地を借りて下さつた。前日できなかった御遺骨の推算に午前中いっぱい時間を要し、一昨日歴史保存局から受領した一柱を加え、全部で九十九柱となりました。焼骨準備を行い、全員で黙禱し、森田団長が一言追悼の言葉を述べ、全員で櫓に点火しました。焼骨時間は風があつたこともあり、思ひのほか早く四時間程ですみました。焼骨後、樹の枝で作つた箸を使い全員で骨上げを

行いました。御遺骨箱は、帰りの航空機内の持ち込みや派遣団員二名で運ぶことなどを考えて一箱にしました。最後に、残灰を海に流して、黙祷しました。天候に恵まれたことと、カナメさんをはじめ現地の協力者が実によく働いてくれたため、夕刻までにすべての作業を終えることができました。宿舎に戻る途中、東太平洋戦没者の碑の前で拝礼をしました。

二十一日、大使館で片岡理事官より遺骨証明書の発給を受け、遺骨箱の封印作業を行いました。

マーシャル諸島共和国政府の関係者との調整をしたジュセフ・ビガー外務省担当者を表敬訪問し、今回のお礼と今後における諸島全域の御遺骨収集や受領に関して、協力をお願いしました。マジエロの空港では、カナメさんとその家族の見送りを受けました。

二十三日、成田空港に到着したところ、遺族会の佐藤会長はじめ遺族の方々の出迎えを受けました。派遣団は、遺族の方々の見送りを受けながら、厚生省に向かいました。

以上が御遺骨を受領したときの行動記録ですが、現在御遺骨は、千鳥ヶ淵戦没者墓苑に眠っております。

最後に、御遺骨受領に際して、佐藤会長をはじめ、英子さん、カナメさん等の実に多くの方々に協力いただけたことを感謝しております。ありがとうございます。

## ギルバートより 御遺骨帰還

日本遺族会 盛 川 英 治

二月十七日、成田空港を出発した政府派遣・キリバス共和国遺骨受領・調査応急派遣団（厚生省社会・援護局栗原忠夫団長ほか厚生省職員二人、応急派遣員二人）日本遺族会職員二人はギルバート諸島ベシオ島より三柱、プタリタリ島（旧マキン島）より四柱のご遺骨を二十七日、祖国日本へ五十二年振りに捧還した。

一行は十七日夜、フィジーに飛び十八日午後、在フィジー日本国大使館（キリバス共和国タラワ環礁、マキン環礁を管轄）の小林二郎大使を表敬訪問、現地キリバス共和国の受入れ状況について説明を受けた。

翌十九日、キリバス共和国・タラワに到着。その足でキリバス政府外務省関係者に表敬する予定であったが、飛行機の遅延により日を改める。夜、現地在住の富塚茂幸氏（日本鯉鮪漁業協同組合連合会・日本鯉鮪漁業者協会より、現地水産学校の教師として派遣されている方）に、本派遣の目的を説明した上、派遣期間中の協力を得た。富塚氏からは、プアリキ（旧北タラワ島）へは船で約二時間。タラワは環礁帯であることから、潮の干満の影響があり、ホテルから毎日遺骨収集場所まで通う

ことは難しい。また、プタリタリへは、本団は飛行機での移動（キリバス航空）を手配していたが、氏からは、国内線の航空事情が不安定であり、航空燃料の不足などによりフライトキャンセルになることが多い。船をチャーターして行くほうがより確実であると聞く。団長の判断により日程を考慮し、プアリキ班は現地滞在に、プタリタリ班は船で移動と決定した。

二十日、遺骨受領のためビケネブ地区文化センターに赴く。ご遺骨はダンボール箱に三柱保管され、団長に引き渡された。集骨時の状況は、ベシオ町の F・T・C（ムーテシーラ海洋訓練センター）校庭において学生が井戸を掘っていた際に偶然発見され、その際遺品も収集されたが、ご遺骨の氏名判明に繋がる手掛かりにはならなかった。

二十一日、ベシオの港から二班に別れ出発。プタリタリ島班は、漁船をチャーターして片道で十六時間を要し到着。遺骨を保管しているアイネンカラワ小学校に向かった。遺骨は校内に建立されている「英霊碑」脇に埋め戻されており、二柱を収骨。情報では遺留品もあつたようだが、前に訪れた邦人が持ち帰った模様で氏名判明に至らない。また、島民の情報により、同島港から北へ一・五キロ程の地点四方所を試掘し、二柱を収骨した。

プアリキ島班は、小型船にモーターボートを一艘付け向かい、プアリキ島

沖合でモーターボートに乗換え上陸。今回の調査は、戦後この島で戦歿した日本兵を悼み、島民が遺体を一方所に集めて埋葬。その後、現地を訪れた千葉県在住の方が埋葬場所に「供養塔」を建立した、との情報からである。場所は六メートル四方を金網フェンスに囲まれた供養塔内の試掘と、回りも試掘調査した。情報では、百数十柱の遺骨が埋葬されているとのことであったが、慎重に調査したが多数埋葬されている状況にあらず、八柱を収集した所で時間未了となり、次回に収集団を派遣することを条件に遺骨を同地に埋め戻した。また、島を離れる際に現地関係者の話によれば、過去三回程日本人が訪れ同埋葬地を発掘、遺骨を持ち帰ったとの証言を得た。

二十三日、富塚氏宅前で焼骨を行い、二十四日、遺骨証明を受領。二十五日キリバス共和国を立ち、在フィジー日本国大使館で遺骨の封印を受け帰国した。

今回の収集はキリバス外務省からの情報と、関係遺族からの情報を元に遺骨収集を実施した訳だが、一部の心ない日本人により、氏名判明の手掛かりとなり得る貴重な遺品を持ち去ったり、ましてご遺骨を無許可で持ち出すという不法な行為に強い憤りを覚える。どうかこの様な状態が続かないよう厚生省に対して同地域にあるご遺骨の早期収集を切に希望したい。

## 靖國神社だより

## 春季例大祭盛大に齋行

平成九年の靖國神社春季例大祭が、神苑の八重桜が咲き誇る四月二十一日から二十三日までの三日間、盛大かつ厳肅に執り行われた。

祭典は、二十一日の「清祓」二十一日の「当日祭」、二十三日の「第二日祭」、「直会」と滞りなくすすめられた。二十二日の当日祭には、天皇陛下が勅使を御差遣になり御弊物が奉つられ、二十三日には、皇族方も親しく御参拝になられた。

## 「清祓」執行

春季例大祭奉仕にあたり、大野宮司以下全神職は二十日夕刻から、齋戒参籠に入った。

明けて二十一日午後三時、拜殿前南庭で清祓「祓所の儀」を執行、参列諸員が祓の麻をとり、心身を清め更に殿内、神域、祭儀の諸具を祓い清めた。引続き御本殿に進み、例大祭がつつがなく奉仕出来ますようにと、清祓「本殿の儀」を奉仕した。

## 勅使堤公長掌典参向

翌二十二日は「当日祭」。天候にも恵まれ、中井澄子日本遺族会会長、工藤伊豆神社本庁統理代理、小田村四郎英霊にこたえる会会長代理、原田喜三奉賛會会長代理、井内慶次郎崇敬者総代をはじめ、各界代表八百四十名が拜殿に参列する中、午前十時、大野宮司

以下奉仕員が御本殿に進み祭典を執行。まず國學院大學吹奏楽部の奏する「国の鎮」と共に、御内陣の御扉が開かれ、次いで和妙・荒妙をはじめ海川山野の神饌五十台が供せられた。

次いで大野宮司祝詞を奏上。午前十時三十分、参列者が奉迎申し上げる中、堤公長掌典、勅使として参向。御弊物を奉獻し、大御心のまにに御祭文を奏上せられた。

次に國學院大學フォイエールホール混声合唱団による「鎮魂頌」の献楽の後、特別参列者が玉串を奉りて拝礼。その後、大野宮司は参列者に対し挨拶を申し上げた。

この当日祭には、防衛庁から、統合幕僚会議議長代理以下陸上・海上・航空の各幕僚監部が参列、外国武官はルーマニア社会主義共和国・スイス共和国・タイ王国の各国からの参列があり、敬虔な祈りが捧げられた。

翌二十三日の「第二日祭」は、三輪良雄崇敬者総代をはじめ、全国から集まった御遺族、崇敬者など五百四十名が参列のもと執行された。また、午後六時には、祭典が無事終了した感謝を奉告する「直会の儀」を執行し、春季例大祭は滞りなく終了した。

## 皇族方御参拝

この度の例大祭期間中、二十三日午

後一時三十分には、三笠宮殿下が御昇殿、玉串を捧げて拝礼せられ、次いで拜殿にて奉迎の遺族崇敬者に親しくお言葉をかけられた。

## 新緑の美しく映えるなか

## 千鳥ヶ淵戦没者墓苑拝礼式

平成九年度の政府（厚生省）主催の、千鳥ヶ淵戦没者墓苑拝礼式は、五月二十六日（月）、常陸宮同妃両殿下の御臨席を仰ぎ、遺族代表、多数の来賓が参列し、厳肅盛大に挙行された。

この日、五月晴れの爽やかな青空のもと、一段と映える新緑に囲まれた六角堂の墓前には、天皇皇后両陛下御下賜の天花籠一対が供えられ、式場には莊嚴の気が満ちていた。

この拝礼式においては、旧ソ連、ソロモン諸島、フィリピン、硫黄島等異郷に倒れ、苛烈な戦場で散華された方々の御遺骨が新たに納骨されるが、緑りの御遺族、遺骨収集協力者が、早くから席について開式を待っていた。

定刻十一時やや前には内閣総理大臣ほか来賓も到着、大天幕の席は満席になった。まもなく総員起立するなか常陸宮同妃両殿下が御臨場になって式典が始まり、山口厚生事務次官が開式の辞、続いて皇宮警察本部音楽隊の奏楽による国歌斉唱のあと、小泉厚生大臣が式辞を述べられた。

（靖國神社社報「靖國」六月号より転載しました。但し宮司の挨拶は紙数の関係で割愛いたしました）

続いて御遺骨が亀田社会・援護局長から小泉厚生大臣に渡され、大臣は捧持して地下の納骨室に安置された。

このあと、総員が起立するなか、両殿下が墓前にお進みになり御拝礼なされ、参列者一同も肅然と拝礼を行った。

御拝礼を終えられ、遺族席に向って御会釈を賜わる両殿下をお見送りましたあと、献花に移り、内閣総理大臣、厚生、外務両大臣、収骨の行われた国の駐日大使、防衛、環境両長官、衆議院厚生委員長、日本遺族会会長、更に、

九名の御遺族代表の方が続き、千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会の八木副会長が締めくくりの献花、拝礼を行った。最後に、亀田社会・援護局長が閉式の辞を述べて拝礼式は滞りなく終了した。

式典終了後、一般参列者は墓前に進み、両陛下御下賜の天花籠を仰いで拝礼をしていたが、御遺族の方々の感慨深げな御様子に胸を打たれた。この度の拝礼式において納められた御遺骨は二、五〇八柱で、当墓苑には三十四万一千八百八十九柱が奉安されることになった。

(千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会機関紙第三六五・三六六号より転載しました。但し、厚生大臣の式辞は紙数の関係で割愛しました。)

## 霊苑 点 描

五月二十六日早朝、私は相談役の大給様のお伴をして靖国神社にお詣りしました。大給様は、新緑の境内を歩き乍ら次のように話されました。

「ここは兄(音羽正彦命)の思い出の所の一つです。戦況がさ程きびしいとは思われていなかった頃の例大祭に、かけ小屋など賑やかな境内を歩いておりました時「ここには僕の友人が幾人も居る。僕も戦死したらここに帰ってくる」と申しました。お祭の賑やかさうきうきしていた私は、一瞬はつとしたことを今も覚えております。五十年か経ちましたが、短剣に短いマントを翻して颯爽と歩いていた若々しい兄の姿は何時までも私の脳裡にやきついております」と。

千鳥ヶ淵の追悼式場正面の六角堂に供えられた天皇皇后両陛下御下賜の菊花大花籠が一きわ気高く拝されました。今日新たに奉安される御遺骨の中にクエゼリン島の九八柱、ルオット島の一柱、ベシオ島の四柱、マキン島の三柱が含まれており、本会を代表して、大給様以下六名の該当地域の遺族が参列しました。納骨の儀並びに追悼式は



向かって右より3人目 大給湛子様

常陸宮同妃両殿下御臨席のもと、前掲のように厳粛にとり行われました。

献花の際、取骨の行われた国のうちロシア連邦特命全権大使代理のユーリ・イワノヴィッチ・スミルノフ参事官とマーシャル諸島共和国マック・カミナガ特命全権大使のお二人が献花されました。

昭和三十七年二月、慰霊鎮魂のことを発意して以来幾多先達の精進のおかげで今日の目を迎えることができ、かの安らぎを覚えましたが、他面厚生省の資料には、マーシャル・ギルバート戦域の戦没者二万四千七百名のうち、未帰還の御遺骨は、二万一千八百柱と記されていることに思い及んで、小成に安んじようとする怠惰に恥しさを覚えました。

(佐藤宗不)

## 第二十七回戦没殉職船員

### 追悼式に参列して

東京 内海 淑子

五月十五日(木)財団法人日本殉職船員顕彰会の主催により横須賀市観音崎公園の戦没船員の碑前で戦没船員六万六千六百名、殉職船員千六百三十八名の追悼式が執り行われました。

本会からは会長ほか十一名が初めて参列しました。(式場の位置、情景などは「環礁」66号の9ページをご参照下さい)

晴天であれば眼前に広がる大海原を見渡せる景勝の地と思われませんが、吹き上げてくる霧で景色が見えないのが残念でした。

全国から集まったご遺族、関係者は五百名を超え広い式場もいっぱいになりました。予報どおり今にも降りだしそうな空模様にて、予定時間を十五分程繰りあげて開式されました。もうその頃からポツリポツリと降り出した雨は海上自衛隊横須賀音楽隊の奉楽による国歌斉唱、永井典彦顕彰会会長の式辞の頃には本降りになりました。

式辞は「大戦に散華し或いは職務に殉ぜられた御霊のやすらかならんとお祈りし、かけがえのない肉親を失われた御遺族に深く哀悼の意を表します」と切々と述べられました。

雨しどど降りしきる中、音楽隊の荘

重な奏楽のうち参列者全員が白菊をお供えし式典を終えました。

聞くところによりますと、大東亜戦争中の戦没船員六万六千三百人の中には十八歳未満の少年が八千三百余人もおり、うち七百八十余人はいたいけな十四歳未満であったそうです。

五十余年のある日、この岬の沖を南海に旅立って未だ還らない幾十万人の御霊を想いますと胸が痛みます。

昭和四十六年五月、第一回の追悼式に皇太子同妃両殿下(現天皇皇后両陛下)は降りしきる雨の中を、お傘もお用いにならないで御供花御拝礼されたと伺いました。その時の妃殿下の御歌は御歌碑として今、御製碑と並んでこの式場に在ります。

かく濡れて遺族らと祈る  
更にさらにひたぬれて  
君ら逝きたまひしか

式典で奉納される予定の観世一門による能楽「海霊」は雨のため場所を観音崎京急ホテルに移して奉納されました。続いて同ホテルで懇親会が行われご遺族をはじめ関係者多数が参加し、歓談のひとつときをすごしました。

今日本会から参加したのは佐藤会長夫妻、佐竹エスさん、岩田とし子さん、松江正子さん、土井厚二さん、腰川妙子さん、鈴木やよひさん、柳沢弘子さん、浜田つき子さん、伊藤たつ子さんと私、内海の十二名でした。



## 輸 送 船 と 船 員

会友 川 副 克 己

☆筆者は昭和八年に東京高等商船学校を卒業、同九年近海郵船(株)に入社、商船に乘組み昭和十二年に数隻目の乗船朝日丸が海軍に徴用され病院船となり、戦場勤務となった。

大東亜戦争勃発の昭和十六年九月に海軍に応召、十二月より第六根拠地隊所属第六京丸駆潜艇長としてマニラ、ギルバート方面の作戦に従事。十九年一月から第五〇駆潜艇長として船団護送任務についた。

同年六月十二日、サイパン島沖で米空軍機の猛攻に遭い三十隻の船団は全滅し本人は重傷を負って七月七日横須賀海軍病院で左脚を切断。二十年九月応召解除。(海軍大尉)

戦後は羅針儀自差修正、海事補佐人として活躍。戦没者慰霊、傷病者の福祉向上、世界平和の実現運動に参加されている。

◇ 太平洋戦争で米国の主要戦略は、我が海上交通路の破壊に集中していたので、日本は終戦までに二、五三四隻、八八三万トンの輸送船が撃沈され、六万三三一名の船員と、輸送途中の十万人を下らない将兵が海の藻屑と消えたのである。

船まで殆ど撃沈されてしまったのだった。

戦争中、船が沈没または破壊されて、油や火の海を泳いだ者は、述べ一五万二、三〇〇人にも達すると言われ、生き残りの船員で二回、三回海に泳いだ者は決して珍しくない。

海軍艦艇はいざ戦闘となれば、応戦出来るから、たとえ撃沈されたとしても撃つだけ撃つた後にやられるのであるからそれは本懐と言うべきであろう。

だが、輸送船は敵潜水艦に遭遇した場合に備えて数個の爆雷を持っていたに過ぎず、逃走しながら何個か投下したとしても相手の潜水艦にとつては、何等痛痒を感じないし何の威嚇にもならない。また飛行機の襲撃に対する対空兵器も貧弱で応戦しても殆ど効果はなかった。

敵はいよいよ物量をもって輸送船攻撃に拍車をかけ、潜水艦だけでなく航空機による攻撃も日ごとに激しさを増してきた。我が輸送船は随時随所で容赦なく撃沈される悲運に見舞われ、ただやられつぱなしと言った、実に目を覆いたくなるような戦況であった。

◇ このような苛烈極まる状況下において船員はなお敢然として、輸送作戦に挺身した。常に第一線で奮闘した船員もまた立派な戦士でありこれらの戦士が陸海軍を上回る損耗率を記録したことは特筆に値する。

船員たちが劣悪な勤務条件に不服も

云わず黙々と任務に励んだのは、燃えるような使命感と、船乗りの誇りがそうさせたのであった。

◇ 平和的通商や漁労を本務とする船員に、以上述べたような多くの犠牲を払わせながら、国は何を彼等に報いたであろうか。

昭和十三年四月、国家総動員法を制定した政府は、それにもとづき、次々に様な勅令や政令を公布したが、船員関係のそれらは何れも国家目的のためにとつた措置であつて、臨時体制下の船員の保護や物心両面の待遇改善を図るためのものではなかった。

◇ 昭和十五年には、普通船員の海員組合および高級船員の海員協会はともに解散させられ、日本海員報国団としてただ国家目的に奉仕させる一つの団体に改変され、船員が自主的に自ら利益を守り、自らの主張を述べる道は完全に閉ざされてしまった。

◇ 昭和二十年八月十五日、三年八月に及んだ太平洋戦争は、無条件降伏というみじめな敗戦によって終わりを告げた。住むに家なく、食うに食なき飢餓線上の国民を救う道は、一にかかつて有無相通ずる国内輸送の早期復興と、船舶による海外からの補給に頼る外に道はなかった。

◇ そこで、船員たちは日本国民の食糧その他の必需物資の輸送と、六百四十

万に上る軍人、軍属や在留邦人の復員輸送と帰還輸送に当ることになったので、海運界と船員に関する限り、戦争は終わっても、戦争とはまた別の困難にして責任の重い任務が待ちかまえていたのだった。

復員と帰還輸送をするには、日本の残存船舶では到底足りないもので、米國から貸与されたリバティ型商船（約一万トン）一〇〇隻とLST船（約二千トン）一〇〇隻、病院船六隻など総計二〇六隻を、船舶運営会で新しい任務に適するように整備し、日本船員を配乗して復員輸送などを遂行することになった。さらには国民の必需物資である食糧や石炭などの緊急輸送、占領軍の軍需物資輸送、ペルシヤ湾からの石油輸送などで日本復興の礎となる物資輸送に従事した。

引揚げ輸送のために使用した日本の船舶は残存の空母や海防艦など陸海軍の艦艇計百二十隻（約二二万トン）と、航海訓練所の練習船などを含めた稼働可能な商船四五隻（約十八万トン）である。これらの引揚げ船を動かした船員は、戦争中から乗船していた乗組員たちで、他の人達が家族の待つ故郷へ帰って行く姿を見ながらまだ米軍の投下機雷が残っている危険な海へと再び船出して行ったのである。

二十年九月から翌二十二年末までに、船舶運営会所属船だけで一、六三九航海、約三百万人の引揚げ者を輸送した

が、同期間中の陸海軍艦艇による引揚げ者を含めて総引揚げ者は五百九万六千人で、その航海は生易しいものではなかった。この引揚げ輸送の往航には、中国人や朝鮮人たちの還送輸送もあった。戦時中、強制的に連行され日本に協力させられ内地の炭鉱や、戦地での設営作業などに労働を強いられた人たち百二十六万人余をそれぞれの本国へ送還したのである。これらの人を加えると、実に七七〇万の人を輸送したことになる。

海上の危険は一ぱい。特に日本沿岸では戦時中と変わらない危険が待っていたそれは米軍が戦時中に投下した一万一千個に上る機雷である。その機雷は、主として瀬戸内海、関門、日本海に多く、戦後だけでも一八六隻の商船が機雷によって沈没し、七七八人の犠牲者を出している。

昭和二十七年四月、連合国との平和条約発効（独立回復）の時運に乗り、国家補償の精神に基いて戦傷病者戦没者遺族等援護法が制定され、続いて翌二十八年八月、法律第八十一号を以て船舶運営会の運航する船舶の乗組員が軍属の範囲に加えられた。

これらの措置によって軍人と民間人の甚だしい格差が縮小され、われわれの多年の念願の一部が達成された。

註！海軍の艦艇、特設艦艇は排水トン、商船は総トン

◇

世に戦争ほど悲惨なものはない。人類はそれぞれこの世に生を受け与えられた天職に精励し、人生を芸術の域に高めて自然に消滅すべく運命づけられているにもかかわらず、戦争はその人間の運命を変え、人類の殺戮（りく）と経済社会の構造破壊へと突入して世界的な惨状を招くのである。

しかしながら今も悲しいことに戦争は一体いつどこでどういう理由で起こるのか、またどうして一般人までまきぞえを食い、犠牲を払わねばならないのか、分らないのが人類の現状である。現に砲撃を交わしている国、一触即発で睨（にら）みあっている国、その他戦争の火種は世界中至るところに転がっている。それがいつ大火に燃え広がるか分らない。

わが国は世界各国から世界一膨大な資源の輸入に頼り、それによって国民生活と生産を維持することによって国が成り立っているのだから「海上輸送」とは絶対に縁を切れないのである。そ

## ブラウンから還ってきた父の日記

東京都 荒木 常子

してその「交通路」を確保することは、武力によっては絶対に不可能であることは、幾多の戦訓によって解明された通りである。すなわち平和こそ、各国が自立発展する唯一の道であり、世界人類の福祉に貢献する大義であること

それを語気を強めて訴えたい。  
それは世界平和はどうして守るか。これは単なる願望や説教で達成できることではない。それにはどうしても日本人全体が温和さ、寛容さ、思いやり、おろかさというような徳性を身につけ、その実践によって各国と交わり、信頼と友好関係を保ちながら、共栄の道を歩む以外にはないと思う。

☆本稿は筆者の御厚意によりその著書「～海軍病院船・朝日丸の命運～」の中から一部を抜粋して掲載しました。

筆者の住所等は次のとおりです。  
〒850 長崎市上戸町一―二五九

川 副 克 己  
〒〇九五八―七八―三五九七

山陰中央新報社の岡部記者から電話が入ったのは昨年十二月十一日夜の事でした。昭和十九年ブラウン島で戦死した父の名を確かめるとかなり興奮した感じで次の様な事を伝えられました。

それは奇跡に近い出来事でした。現在アメリカのオハイオ州に住むイモンドジュレスピーさんという方が、昭和十九年少年兵としてマーシャルのエンウエトク島上陸の折「荒木力次」

と署名のある作業日誌と寄せ書き入り  
の日の丸を拾い、その後各地転戦の後、  
沖繩に上陸し戦後取材で知合った日本  
の女性記者に持主に渡してほしいと依  
頼されたそうです。

国旗の寄せ書きに「平田村」とあつ  
たため、持主は此の地出身者と判断さ  
れ、平田村出身の岡部さんが担当とな  
り八方手をつくした末、厚生省の力を  
得て漸く私を探し当てたとの事でした。

岡部さんのホツとした喜びが受話器  
を通して温かく伝わって来ました。二  
日後にはわざわざ空路日誌を届けて下  
さいました。日の丸の主はまだ分かっ  
ていないそうです。

手のひらに載る程の淡いピンク色の  
日誌は、多少色褪せ、綴じ目がゆるく  
なつてはいましたが、戦火をくぐり、  
五十二年の歳月を経たものとは思へぬ  
程インクの字も滲む事なく、表紙には  
「作業日誌 荒木力次」と懐しい父の



字ではつきり読みとれました。父独特  
の胡麻粒の様な小さな字で書かれた日  
誌は、昭和十九年一月一日より始まり  
二月八日で終わっていました。

海軍省水路部の技官であった父の日  
誌はそれでも一月半ばまでは掃海作業、  
海図の作成、軍部との連絡打合せ等で  
時にはドラム罐の風呂に入ったり、釣  
れた鯖でさしみやすしを作つて食べた  
と記されていました。

一月末頃になると、宿舎で仕事中央  
然の敵機来襲で機銃掃射を受け、頭上  
を弾丸が通過し側の壁に当つて足許に  
落ち、急ぎ防空壕に飛び込んだ事や、  
その翌日より大型機等飛来し一月三十  
一日には早朝からの敵機来襲で遠くエ  
ンチャビ方面に火が見えたと記してあ  
ります。

二月になつてからは終日数回も繰返  
し爆撃を受け、メリレン南部に毛布の  
まま移動、野営を始め二日には水も無  
くなり一日乾パン三枚の食事に咽喉の  
乾きは椰子の水でいやしたとあります  
がその日は早朝から午後一時頃まで間  
断無い爆撃で自分達の宿舎も、陸軍の  
糧舎も測量艇四隻も皆炎上してしまつ  
た様でした。五日にはエンチャビが大  
爆撃されて飛行場はさんざんに破壊さ  
れ、四日と五日の二日間で百三十五個  
の爆弾が投下されたと書いてあります。  
六日は大スコールがあり野営の毛布  
も何もビシヨビシヨになつたとあり、  
欄外には「友軍未だ来援せず」と記入

されて、情報の途絶えた孤島で未だ日  
本軍の力を信じていた事が伺えます。

翌二月七日は乾パン一枚の食事とし  
て早朝から大挙来襲した敵機の機銃掃  
射をさんざんにあび、「この様な戦争で  
は負ける事は明らかだと素人の自分に  
も想像出来る」と書いています。

八日は爆撃を受けた後火葉の爆発が  
起つたと書き、三行程で日誌はその日  
で終わっていました。日誌の後方には  
力無く座っている若い男性のスケッチ  
が画かれていました。その後戦火は烈  
しくなり玉砕の日二月二十三日を迎え  
たのでしよう。その時の父の気持を思  
い、胸が痛くなる思いがします。

早速ジレスピーさんにお礼の手紙を  
書きました。年が明けて六日、突然ア  
メリカのジレスピーさんから電話がか  
かつて来ました。先方はいろいろ話し  
たかつたと思いますが言葉の壁が厚く  
ただただ御礼の言葉を涙と共に繰返す  
だけで終わってしまいました。そして追  
いかける様にジレスピーさんから長い  
手紙が届きました。それによると少年  
兵として十六歳で参戦し、各地を転戦  
した事、自身も腹やお尻に負傷したが  
今は元気でオハイオの家で五人の子供  
さんやお孫さん共々幸せに生活してい  
る事、日誌は翻訳してもらつて読んだ  
が荒木さんの優しさに共感した。愛す  
る人を戦争で亡くすことはどんなにつ  
らいことか。長い間、日誌を遺族に  
返そうと思つてきたが、漸くその願

がかない嬉しい。その他細々と書かれ  
ており、温かい人柄がひしひしと伝わっ  
て来ました。

アメリカ人も日本人も皆同じ心を持つ  
た一人の人間であり、その人々が突然  
の不幸に見舞われる戦争は決して再び  
起してはいけなくと強く感じました。

父の戦死の場所はブラウン環礁メリ  
レンとは聞いていましたが遺骨も戻ら  
ない現状ではどこまで信じて良いのか  
と半信半疑でしたが、日誌にはつきり  
メリレンとあり、やっと私の心の中に  
父の終焉の地が定着しました。今年  
は丁度母の十三回忌に当たりますので父の  
日誌も同時に供養したいと思つていま  
す。

①父の日誌の中に三ヶ所程、エニワト  
ク島(日誌のまま) 旅団副官大見中尉  
と会つて打合せをしたとあり、もしや  
と思ひ、平成六年度本会の現地慰霊の  
時御一緒した大見シノブ様に電話した  
ところ、正に大見中尉夫人と分かり二  
人で奇遇を驚き合いました。

②ジレスピーさんは父の日誌と共に友  
人から預かつた「林植重」の署名のあ  
る住所録と手帳を寄託され、これも岡  
部さんの御努力でお兄さんの岡谷市の  
林広さんの手許に届けられました。林  
植重さんはクエゼリンで二十二才で戦  
死されており、このお宅で「南十字星」  
を拝見したという岡部さんの話で本遺  
族会員と分かり早速電話して林さんの  
奥様とも喜びを分かち合いました。

### 英子・ラポイントさん クエゼリンから一時帰国

クエゼリンの陸軍病院に院長秘書として勤務されている英子さんは、ここ十年来、私ども慰霊団が訪れる度に、陰に陽にお世話を下さっています。一九九三年に、陸軍病院に御遺骨が沢山保管されていることを教えて下さり、これを根拠に政府におねがいで外交折衝を重ねて頂いた結果、ようやく本年三月に、別稿のとおり、祖国にお迎えすることができました。昨年クエゼリンへの慰霊団が格別お世話頂いたことは66号に紹介されたこと



前列右から2人目 ラポイント夫人

おりです。

英子さんは、去る四月十七日、親族の結婚式に参列のため帰国されましたので、五月五日に九段会館で在京の役員や旧知の会員と会食懇談し、新緑の皇居東御苑を散策いたしました。

久しぶりに日本の肉親たちとお会いになり五月十三日羽田発、ハワイで大学の夏休みで帰国するお嬢さんと一緒にクエゼリンに帰られ、本会に丁寧な礼状を寄せられました。

### お便りの中から

ハワイ 徳原 徳子

佐藤様及び遺族会の皆様お元気ですか。徳原の死去に際して皆様から丁寧なお心づかいを頂きありがとうございます。

私は二月二日にハワイに戻って以来、友人の家にお世話になっていました、ようやくアパートが見つかり、五月一日に引越しました。中華街の真中にある新築の市営アパートで、運よくくじ引に当たったのです。古くからの友人と旧交をあたためるなど、ハワイは私を温かく迎えてくれました。

また仕事に戻ることにありますが、勤務先は歩いて一〇分の所で、大そう便利です。たった一人になってしまい、

思いがけずハワイでの暮らしが始まりましたが、一体これからどんな人生が待っているのかと考えると不安になります。一日一日を大切に生きていきたいと思っています。

秋頃には日本に行ってみたくと思っています。皆様にお目にかかれるのを楽しみにしています。

(郵便の宛先と電話は次のとおりです)

Mrs. Tokuko Tokuhara  
1039 Kekaulike St. A402  
Honolulu, HI 96817  
U.S.A.

☎ 808-547-5171

ルオット 節子・クーロンク

遺族会の皆様からのお便りや折々のお供えものの材料などをお届け頂いて感謝しております。

墓苑の鳥居と柵のペンキ塗りは、リチャードと二人で予定どおり正月前に終り、ほっとしました。



ルオットの鳥居を塗装するクーロンク御夫妻

後の方の鳥居に、ルオット ロイ・ノーマの文字を書き入れました。中々思うように書けませんでした。

リチャードは、まだ日本のサクラを見たことがないので、来年の春には行きたいと云っております。また、スキューバダイビングが好きで、六年程の間に四〇〇回位潜っています。

リチャードの撮ったビデオテープを送ります。

日本の船や飛行機が見えます。船は昭栄丸、秋葉山丸、生田丸、朝風丸、立山丸、TOKYO MARU、(? 長興丸) 永興丸、KUMBU MARU U (? 建武丸) #7 拓南丸、#11 富士丸などが見えるそうです。

この島に四〇年近く働いているハワイ出身のヘンリー木村さんから聞いた話では、一九六五年の土木工事のとき沢山の白骨が出てきたので、ハワイの二世、三世の人たちが木箱を作って納め、墓苑の中に埋葬したそうです。

これからもリチャードと二人で日本の遺族の皆さまに代って、時々墓苑の清掃やお供えものをつづけるつもりです。皆さまとお会いできるのを楽しみにしております。

## 私の歩んだ道

埼玉県 中根 杉子

私は学校を卒えるとき、将来はひとり立ちのできるように職を身に付けようとして、姉の嫁いだ舞鶴市内の病院にナース見習として勤めました。

院長は退役海軍軍医中佐で、町の人から「スパルタ式」だと云われ、入ってすぐやめる人もありましたが、私は辛いと思ったことは一度もなく、懸命に働きました。

院長も奥様も大変よい方で特に奥様は料理や裁縫、家事なども教えて下さり、院長から時々講義をうけて一所懸命に勉強した甲斐があつて、昭和六年に看護婦の国家試験に合格しました。

賞として腕時計を頂き、給料は六円から倍の十二円に上がりました。

一年間のお礼奉公をすませた昭和七年四月の或る日、突然右耳がひどい耳鳴りを起こし、はげしい頭痛、嘔吐が止まないで、大阪の専門病院で受診したところ「メニエール氏病」という難病で有効な治療法はないとのことでした。その後どこに行ってもビタミン剤が出るだけです。今も右耳は全く聞こえず、右の方からのお話に失礼することがあります。

昭和九年、二十二歳の時、姉のお姑さんのお世話で結婚することになりました。相手の方は埼玉県出身で、軍艦

多摩に乘組み、根拠地の舞鶴に寄港すると姉のお姑さんの家に下宿していたのです。二月三日に埼玉の主人の家で式を挙げ、東京の飯田町（当時の麹町区飯田町）に住むことになりました。

私は婦長の後任者が来るまで暫く病院に帰りました。やがて二男、一女に恵まれ世間並みの幸せな生活が続きました。

主人は昭和八年に海軍を除隊し、日大第一病院の汽罐室に五年勤め、十六年に羽田の日本夜光塗料（株）に転職、四月から社宅に入居しました。日立飛行機製作所の隣で、エンジンの音は四、六時中休みなしでした。職場になれる間もなく十六年十二月、夫は応召で横須賀海兵団に入団し、その後海南島、大島島、南洋に移り、毎月の便りには子供の事が多く書いてありました。

日毎に戦争が激しくなり、私は少しでも生活のたしにと新聞配達、空地には野菜を作つて頑張りました。長男が百日咳にかかり二百日もきつ咳がつづき、やつとおさまりましたが後遺症が残り、五十年経つた今も咳になやまされています。

羽田の杜宅にはガスがないので石炭がらの中からえ残りを拾い出して、拾った流木と一緒に七輪で炊事をしました。飛行場の調理場の廃棄物の中から食べられそうなるを探して拾い集めていたのを見ておられたのか、兵隊さんが、炭俵にまだ使える野菜を

詰めて放つて下さった時は大変助かりました。

夫からの手紙に、戦地から便りがなくとも、軍から給料が送られていたら生きている、と書いてありました。それを信じていたのですが、二十年二月の或る日突然市役所から、一年前の「十九年二月六日クエゼリンで戦死」との知らせがあり、一瞬我を忘れて茫然となりワーツと泣き出しました。

会社の皆さんが祭壇と位牌、線香立てを作つて下さり、みんなで丁寧にお参りして下さいました。

三月になって空襲は益々げしくなり正午のサイレンと同時にB29が五機ずつ来襲、家を開け放して防空壕に走る。夜になって空襲警報が鳴ると、照明弾、爆弾、焼夷弾と、灯りをつけて、壊して、燃やすという順序の繰り返し毎日でした。

炎と煙で夜か昼かの区別のつかないときもありました。

戦局のことは全然わかりませんが、サイパン、硫黄島、沖縄、本土空襲と不安が重なってきました。そして、八月十五日、すべてが終わりました。

あのとき、誰もが考えたように私は幼な子三人を抱えて実家の京都府福知山に帰りましたが、折悪しくも由良川の氾濫で田畑は海のようになり地域の食糧一切がなくなつて農家さえも食べ物のない時、食べ盛りの子供三人を抱え難儀しました。

戦死者の遺族にはお上からお金が下がるなどと色目で見られ、肩身の狭い思いをしました。野原の雑草を摘んで増量材にしたり、土木工事の作業もしました。

新制中学校の建築作業員として働き、完成の後、戦没者の遺族救済の意味もあつたのでしょうか、学校の用務員に採用され、子連れで住込みが許され大そう助かりました。給料は安いですが、家賃、電気、水道料がいらないのですから。

小使いと給食の手伝いで休むひまのない勤務でした。子供三人が「お父さんが生きていたらいいのになあー」といいました。この母では頼りにならないのか？ とつぶやきました。

永年つとめたため六十三歳の四月から共済組合の年金が頂けるようになりましたのはありがたいことでした。

戦争で世間並みの苦勞をいたしました。が、小さい乍ら家も建て、お墓も作り、主人五十回忌の法要は三人の子供の発案で自分の家で行いました。

借金もありません。

子供三人とも横道にそれず夫々家庭をもつて幸せにすごしています。ささやか乍ら親のつとめは果たせたのだと思つています。これからは子供たちの迷惑にならないよう人生の終了を迎えるように心がけています。

## 名 簿 訂 正

(12) ◎ 平成 3 年 8 月 15 日発行の会員名簿を次のとおり訂正いたします。

| <頁> | <氏 名>         | <訂 正 事 項>   |
|-----|---------------|---|
| 21  | 穂 刈 直         | 〒071 旭川市末広東一条 8-5-10 ☎0166-57-6835 戦歿者穂刈猪之吉 所属部隊 4 施<br>戦歿年月日 19. 2. 6 戦歿地 ルオット<新入会>                    |
| 25  | 打 矢 和 子       | 〒015 本荘市出戸町字小人町 7-1 ☎0184-22-6303 戦歿者打矢精聚 所属部隊 64 警 戦<br>歿年月日 20. 7. 11 戦歿地 ウォッセ<新入会>                   |
| 27  | 柴 沢 宏         | 〒312 ひたちなか市東大島 1-3-22 ☎029-272-0402 戦歿者柴沢重三 続柄長男 所属<br>部隊 3 特根 戦歿年月日 18. 11. 25 戦歿地 ギルバート<新入会>          |
| 28  | 近 藤 芳 雄       | 茨城県は栃木県に訂正  |
| 30  | 小田原 利 子       | 久喜市下清久 649-5 ☎0480-23-2312 に変更  |
| 31  | 高 林 芳 夫       | 〒332 川口市金山町 14-15-305 ☎048-223-6110 に転居   |
| 33  | 高 山 貞 男       | 高山満喜男が継承  |
| 35  | 井 上 武 彦       | 〒194 町田市金森 1038-2 ☎0427-95-4582 戦歿者井上梅次郎 続柄次男 所属部隊 24 航<br>戦 戦歿年月日 19. 2. 6 戦歿地 ルオット<新入会>               |
| 36  | 大 高 時 男       | 〒157 世田谷区岡本 3-36-5 岡本タウンハウス 303 ☎03-3415-1255 戦歿者大高信秀 続<br>柄次男 所属部隊 海軍気象隊 戦歿年月日 19. 2. 6 戦歿地 クェゼリン<新入会> |
| 36  | 小 山 キミ子       | 渋谷区富ヶ谷 1-8-21-802 ☎03-3460-6202 に変更   |
| 37  | 菅 谷 喜代子       | ☎080-85-13938 加入  |
| 41  | 岩 瀬 三樹三郎      | 〒230 横浜市鶴見区大東町 11-1 ☎045-511-4096 戦歿者岩瀬富士松 続柄弟 所属部隊<br>3132 戦歿年月日 19. 2. 6 戦歿地 クェゼリン<新入会>               |
| 44  | 田 中 トメノ       | 田中大作が継承   |
| 44  | 橋 田 正 幸       | 〒227 横浜市青葉区鴨志田町 802-19 ☎045-961-1678 に変更  |
| 44  | 平 井 加代子       | 〒243 厚木市愛甲 953-1 ☎0462-48-2388 戦歿者平井一郎 続柄娘 戦歿年月日 19. 2. 6<br>戦歿地 クェゼリン<新入会>                             |
| 45  | 平 井 貢         | 〒243-04 海老名市中新田 2020 ☎0462-31-6804 戦歿者平井正秋 続柄弟 戦歿年月日<br>19. 2. 5 戦歿地 クェゼリン<新入会>                         |
| 47  | 古 川 龍 尊       | 〒942-02 新潟県中頸城郡頸城村大字森本 1011 ☎0255-30-2510 戦歿者古川一三 続柄子<br>所属部隊 63 警 戦歿年月日 20. 6. 20 戦歿地 マロエラップ<新入会>      |
| 48  | 廣 上 敏 夫       | 〒933-01 高岡市伏木本町 19-3 ☎0766-44-2425 戦歿者廣上喜一郎 続柄長男 所属部<br>隊 4 施 戦歿年月日 19. 2. 6 戦歿地 クェゼリン<新入会>             |
| 50  | 星 野 うま子       | 星野貞雄が継承 続柄子   |
| 51  | 竹 田 昭 一       | 〒390 松本市両島 14-7 ☎0263-25-5722 戦歿者竹田栄次郎 続柄長男 所属部隊 3 特根<br>戦歿年月日 18. 11. 25 戦歿地 タラワ<新入会>                  |
| 54  | 森 幸 一         | 〒431-34 天竜市石神 199 ☎0539-28-0443 戦歿者森厚 続柄長男 所属部隊 3 特根 戦<br>歿年月日 18. 11. 25 戦歿地 タラワ<新入会>                  |
| 59  | 森 本 信 好       | 〒639-22 御所市朝妻 443 ☎07456-6-0143 戦歿者森本政一 続柄長男 所属部隊 111 設営<br>戦歿年月日 18. 11. 25 戦歿地 タラワ<新入会>               |
| 61  | 松 本 タカミ       | 長女米田葉美が継承   |
| 62  | 道 源 ヒ サ       | 道源計彦が継承 続柄子   |
| 63  | 藤 原 トシ子       | 〒761 高松市花ノ宮町 3-1-14-205 藤原敬生方 ☎0878-67-8446 高知市より転居   |
| 64  | 門 田 登美子       | 〒799-23 愛媛県越智郡菊間町浜 2634 ☎0898-54-2844 戦歿者渡辺登 続柄姪 所属部隊<br>6 通 戦歿年月日 19. 2. 6 戦歿地 クェゼリン<新入会>              |
| 66  | 山 崎 資 夫       | 〒780 高知市鴨部 3-4-13-2 ☎0888-43-0208 戦歿者山崎正志 所属部隊 佐鎮 7 将<br>戦歿年月日 18. 11. 25 戦歿地 タラワ<新入会>                  |
| 66  | 井 上 篤 幸       | 〒819-11 前原市大字篠原 746 ☎092-323-0036 戦歿者井上一二三 続柄長男 所属部隊 6<br>1 警 戦歿年月日 19. 2. 6 戦歿地 クェゼリン<新入会>             |
| 69  | 安 達 シツヨ       | ☎0956-49-7199 追加  |
| 72  | 池 田 ト ミ       | 宮崎県北諸県郡三股町大字榑山 4381 に変更   |
| 77  | キリバス共和国名誉総領事館 | 千代田区丸の内 1-5-1 新丸ビル 4-047 に変更  |
| 77  | 笹 倉 昭 治       | 〒230 横浜市鶴見区矢向 3-25-18-602 ☎045-584-2703 に変更   |
| 77  | 菅 野 久 雄       | 草加市新栄町団地 1-8-304  |
| 78  | 橋 本 岩 樹       | 広島市安佐南区山本 1-18-20 に変更   |
| 78  | 堀 口 太 平       | 〒297 茂原市高師 900-1 ☎0475-22-5188<新入会>   |
| 34  | 谷 沢 英 子       | 〒270-11 我孫子市我孫子 745-8 に変更   |

### 靖國神社の宮司が 交替されました

平成四年四月、靖國神社中興の祖と謳われた松平永芳宮司(本会篤志会員)の懇請によって第七代宮司に就任された大野俊康様は、定年規程により、五月二十日付を以て退任されました。新宮司には五月二十一日付を以て、湯澤貞権宮司が就任され、後任の権宮司には三井勝生彌宜が就任されました。



紙の雛人形

この紙人形は、ひな人形の広告を見ながら今年作りしました。材料はお菓子などの包装紙をためておいたものです。遺族会に飾って頂けたら幸いです。お内裏様の身の丈は五センチメートルです。

中根 杉子 (八三歳)

## 寄付者芳名

(敬称略・順不同)

次の会員及び会友の皆様は年度会費を完納された上更に慰霊奉賛のため浄財を御寄付下さいました。厚く御礼を申し上げます。今後とも本会の永年存続のため何分の御協賛を切にお願い申し上げます。

- |       |       |       |        |       |       |        |       |       |
|-------|-------|-------|--------|-------|-------|--------|-------|-------|
| 北海道   | 穂刈 直  | 東京都   | 青木 利一  | 荒木 常子 | 渡辺 三三 | 岐阜県    | 山田 八重 | 吉田 綾  |
| 青森県   | 池田 こと | 小笠原 廣 | 飯島浩一老  | 石川 勲  | 石谷 典夫 | 静岡県    | 飯田たつ子 | 市川 市郎 |
| 菅井 光  | 田中正治  | 塚原 ハナ | 石橋 湛一  | 岩浪 邦江 | 内海 静枝 | 大塚 かね  | 後藤 行雄 | 土屋まさ子 |
| 岩手県   | 小杉 サヨ | 菅原 キイ | 遠藤 安男  | 加藤 照  | 黒川 誠  | 野崎 豊秋  | 服部くにゑ | 川越 コウ |
| 鈴木伊佐男 |       |       | 小泉 文江  | 小島八重子 | 小山キミ子 | 愛知 知   | 大見シノブ | 山田 あき |
| 宮城 県  | 相馬 ツキ | 高橋とし子 | 佐竹 エス  | 佐藤 宗丕 | 斉藤耕太郎 | 川村 正一  | 浜田 芳枝 | 山田 あき |
| 新田富美子 | 平形いせこ | 山本 ちゑ | 斎藤 孝平  | 斎藤 幸江 | 清水 武  | 三重 県   | 伊藤 みね |       |
| 秋田 県  | 奥山 キノ | 近藤キクエ | 菅沼 昇   | 菅喜喜代子 | 高橋 鎮夫 | 京都 府   | 川本 彦次 | 中川 修  |
| 山形 県  | 丹野 アサ |       | 佃 喜美   | 出口 スエ | 中村 久  | 村上 増枝  | 東地井義訓 |       |
| 福島 県  | 鶴沼 久義 | 楠 宗親  | 中村 順子  | 西沢 和子 | 沼山 正英 | 大阪 府   | 中野フヂエ | 馬場富美子 |
| 富田 ミツ | 三浦 一郎 |       | 長谷川智子  | 番場 信子 | 晝間 樂平 | 福田 音和  |       |       |
| 茨城 県  | 大熊 正美 | 神谷 和枝 | 柳沢 正雄  | 山口 裕子 | 六軒つる子 | 兵庫 県   | 枝光 剛郎 | 土井 厚二 |
| 柴田 政子 | 鈴木 藤太 | 北條 晃  | 渡辺 妙子  |       |       | 山形 雅俊  |       |       |
| 堀江 誠一 | 富田 保  | 吉見 千寿 | 神奈川 県  | 赤坂 スズ | 石沢 洋子 | 和歌山 県  | 福井 栄子 |       |
| 栃木 県  | 猪瀬 ナカ | 木村恒三郎 | 岩瀬三樹三郎 | 岩田とし子 | 上田 文子 | 鳥取 県   | 井上 照美 | 杉川 及江 |
| 田名網武夫 | 吉川 芳蔵 |       | 川名 茂子  | 金子 武晴 | 熊沢 静子 | 島根 県   | 中浜ヒメコ |       |
| 群馬 県  | 清水 宏一 | 珍田 光子 | 栗田千代子  | 佐藤 登志 | 渋谷 良雄 | 岡山 県   | 金子ミサヲ | 浜田 数江 |
| 日向野キク |       |       | 鈴木 孝輔  | 平井加代子 | 吉田 操  | 広島 県   | 浦手 ハル | 奥井 礼子 |
| 埼玉 県  | 天野 好子 | 井沢 なを | 新 潟 県  | 安中 キヨ | 片桐 サキ | 佐々木千鶴子 |       |       |
| 宇田川ひさ | 小野 リエ | 北原ひで子 | 後藤 末吉  | 小林 正道 | 近藤 茂  | 山口 県   | 矢次 里子 | 廣田 通男 |
| 近藤マスエ | 柴田 貞子 | 鈴木 裕子 | 佐藤 フジ  | 渋谷セキノ | 高野 清  | 香川 県   | 奥田 和広 |       |
| 藤田 清瀬 | 山下 みつ |       | 高林 セキ  | 藤田 ヨリ | 山田 正三 | 愛媛 県   | 伊藤 梅子 | 泉田 君子 |
| 千葉 県  | 石川 きみ | 腰川 妙子 | 米田 トシ  |       |       | 久保田泰子  | 長岡 俊夫 | 松友 都  |
| 桜井 一正 | 浄永 孝  | 津久井艶子 | 富山 県   | 池田 淑子 | 金山 深雪 | 三好 邦博  | 森田 静子 | 渡部 守  |
| 豊谷美恵子 | 芳賀タツエ | 広原 チヨ | 小林 照子  | 柴田外美子 | 棚橋 昭二 | 高知 県   | 小松千代美 | 田中 百合 |
| 宮本 豊吉 |       |       | 寺西 ヒサ  | 中林 ちよ | 広上 敏夫 | 徳弘 萩子  | 馬場 常  |       |

- 福岡県 青山アヤ子 井上 篤幸
- 一瀬クモエ 金子庄之助 鐘ヶ江敬介
- 橋本マサエ 松本 房枝 村上 清隆
- 家迫 政雄 吉松 貞子
- 佐賀県 金子 茂 草場 マキ
- 坂本 トセ 松永タツ子 山田 雪子
- 長崎県 安達シツヨ 板浦 重雄
- 林 文枝 前田 フサ 森 テル子
- 山下 タエ
- 熊本県 植川 二男 植田 静夫
- 片山 玲子 鬼海 富夫 北村 権蔵
- 塚野ヨシ子 土田 利子 村上佳寿子
- 大分県 木村二三夫
- 宮崎県 友枝カオリ 森 フサエ
- 山内 キク
- 鹿児島県 川畑ツルエ 出花 利文
- 野平 ヨネ 原田 惟行 村上ノキ
- 沖縄県 石原 キク 久高 友三
- 宮城 華子
- 篤志会員・会友等 大給 湛子
- 松平 永芳 中 攻 会 渡辺 哲夫
- 太田小太郎 秋元 輝夫 稲毛 三郎
- 石元 利親 江村 源次 岡山 尚信
- 川副 克己 小賀坂四郎 吉良 正義
- キリバス共和国名誉領事室 志賀 淑雄
- 篠崎 英雄 高田源次郎 豊谷 秀光
- 橋本 岩樹 兵頭 義彦 堀口 太平
- 小賀坂清治 小賀坂美代子 鈴木 信子
- 水野 節子 山岸 ミイ 大畑ひで子

以上は平成八年十二月一日から九年五月三十一日までに、寄付された方々二五五名で、その合計金額は百二十六万六千三百二十円です。

### 本部だより

#### ☆粟林顧問に英国から勲章

本会顧問粟林徳五郎様に、エリザベス女王陛下から大英帝国勲章(O・B・E)が授与されました。この勲章は民間人に与えられる最上級のもので、キリバス共和国とツバル国の名誉総領事の公職など永年の活動が高く評価されたものであります。授章式は昨年十一月十二日に英国大使館で行われました。

#### ☆篤志会員の委嘱に關連して

本会は発足以来の恒例として厚生省の現職課長二名に篤志会員を委嘱してきましたが、本年は先方の御意向によりお願ひしないこととしました。職務上の協力は惜しまないとのことです。

#### ☆キリバス慰霊団訪島

元第七五五航空隊勤務の田中喜作様を団長に元軍人八名と遺族等十名の慰霊団(うち本会関係者五名)が、六月十七日から二十九日までの十三日間、ナウル、タラワ、マジユロ、グアムを慰霊巡拝されました。

#### ☆リングセラップ島民に船を

ピキニ環礁での核実験で島を追われてメジャト島に疎開している島民を支援するために、作業船(マーシャル語でブンブン)を贈る運動の第一船りイマンセン号が七月十八日に横浜港から貨物船で現地に送られました。

右運動の事務局は次のとおりです。

〒二四〇一〇一 神奈川県 葉山町

長柄六九〇一 清水谷子

〒〇四六八七五〇六〇三

#### ☆お便りをお寄せ下さい

この「環礁」を、同じ境遇の仲間たちの心のふれ合いの場としてお気軽に御利用下さい。身の周りのこと、趣味やレクリエーションのこと、この会に対する率直な注文など何なりとお寄せ下さい。採否と多少の手直しはあらかじめ御了承下さい。

#### ☆入会のおすすめ

本会は、会費を納めた者を会員として登録し二月と八月に会報「環礁」をお届けしております。

マーシャル諸島とギルバート諸島方面の戦没者の親族ならば誰でも、又、御一柱に何名でも御入会頂きます。同方面に勤務された戦友の皆様には会友として御参加頂いております。会員、会友とも会費は一ケ年二千元で入会金は要りません。

#### ☆会費完納のおねがい

本会の活動に必要な経費はすべて会員と会友の浄財だけで賄われており、他からの補助等は一切ありません。会費を長く続けてゆくためには財政の安定が是非とも必要でありますので、会費の完納にご協力下さい。会費を納めない方は退会の申し入れがあったものとして、会員名簿から削除し、「環礁」の発送を中止しますので、事情御賢察の上悪しからず御了承下さい。

☆事務局手不足のため次のことに御協力ください。

一、会への送金は原則として「郵便振替」を利用ください。申出でない限り領収証は発行しませんので郵便局の受領証を保存してください。

二、本部への電話は月曜日から金曜日までの午前十時から午後四時までにお願いいたします。

### 計 報

ハワイ在住の大里 清様が、平成八年十月十七日に享年八十七歳を以て逝去されました。

大里様は、永い間クエゼリン基地に勤務され、クエゼリン墓苑の維持管理等に奉仕して下さいました。謹んで御冥福をお祈り致します。

### 訂 正

「環礁」66号9頁中、生田丸の沈没場所欄の(エニエタク)は(クエゼリン)の誤りでした。謹んで訂正いたします。

### 本 部

〒103 東京都中央区日本橋人形町

一八八二(泉商事ビル)

### マーシャル方面遺族会

電話〇三三三六六一八七六〇

FAX〇三三三六六一八二四一